東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十一卷第二號

昭和十五年八月

哀辭　故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……　經濟學博士　八木芳之助

水産資源の保全について……　經濟學博士　蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……　文學博士　矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……　經濟學士　德永清行

自由貿易主義の吟味……　經濟學士　岡倉伯士

記事

財部教授逝く、

故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸正雄　本庄榮治郎　蜷川虎三

木村喜一郎　吳文炳　宗藤圭三　岡崎文規

青盛和雄　松岡孝兒　石川興二　菊田太郎

黑正巖　藤本幸太郎　谷口吉彥

附錄

彙報

外國雜誌論題

財部先生を憶ふ

蜷川虎三

財部先生を憶ふと書き出さねばならぬことは悲しいことである。先生は未だお亡くなりになる御齢ではない。恐らく先生の意中にはいろいろな學問的の仕事の御計畫があつたことであらうと御察しすると暗然たらざるを得ない。

少くとも私の知る限りでも、先生は「社會統計論綱」(明治四十四年)以後の先生獨自の統計學を大成されるおつもりで、講義案などもいつも手を加へられ新しい問題に進んでをられたやうである。また人口統計論については先生の多年研究された所で論文も多いが、これも著書として完成される豫定であつたことは慥であ

る。もう一つ先生の御仕事の豫定に入つてゐたと思はれるのは統計學史の研究である。先生の名著「ケトレーの研究」(明治四十四年)が統計學史的研究に於ける幾多の問題を提起してゐることからも察せられるが、先生が文獻に通ぜられることは實に驚くばかりで、また到底入手出來ないやうなものをよく蒐集愛藏してをられたが、單に先生が讀書家であり愛書家であつたばかりでなく後年學史的研究を集大成されるための用意であつたに違ひない。

かうした企圖は先生が亡くなられるまで持續けてをられたことは時々の先生のお話でも窺ひ得たが、先生の御健康がこれを阻んだことは遺憾のことである。先生が健康を害されたのは大正十五年の初夏の頃からだつたと記憶するが、しかし先生は相變らず讀書を絶たれず古いもの新しいものを問はず讀んでをられた。昨年の秋頃であつたか會議室で私の隣席にをられた先生が紙片に何か難しい字を三四字書かれて「知つてゐるか」と渡されたが、もちろん私にはそれが何を意味するかよりも第一何と讀むかさへ分らなかつた。先生は嬉しさうに「支那の本だよ、魚のことを書いてあるんだが漸く手に入つた」と話された。恐らく支那の何かの書物に掲げてあつたこの書物を久しく探してをられたに違ひない。

先生の學問と讀書の領域は極めて廣く、勉强する者に對し誰にも厚意と同情をもたれ、その者の專門の學問について話をされた。恐らく先生を知る者は誰もかういふ經驗をもつであらう。そして多くの文獻を教へられ興味ある問題を示唆されたことゝ思ふ。私は大學の卒業を控へて大學院で統計學を勉强したいと思ひ學生ののんきさで眞如堂前の先生の邸宅を訪ねたことがある。先生は氣輕に玄關に出て來られ、「まあ上れ」とのことで書物で一杯になつてゐて漸く眞中が坐れるくらゐの二階に通されたが、先生は私の希望を容れられ統計學の勉强をすることを許して下さつた。而も先生は統計學ばかりでなく水產經濟の研究もやつて見ろといはれ、丁度山本教授がその方面の研究をしてをられ

るから指導を受けるがいゝと親切に話され、なほそれについては經濟地理の方面の勉强もやらねばならぬと注意して下さつたが、實はその頃、經濟地理などについて知る所のなかつた私には十分に先生を理解することが出來なかつた。その後經濟地理の研究が我國に於ても盛になるに及び先生が如何に早くからこの方面に着目してをられたかを思ひ敬服に堪えなかつた。

それから十七年、先生の下で私は隨分我儘な勉强をして來たが弟子に對し寛大な自由な先生は一度も咎めることはなく、いつも優しい親切な先生であつた。いろいろと心の中では考へてをられてもこれを積極的に主張されることはなく、相手方にその氣持がなければ强ひて求めないといふのが一貫した先生の態度であつたやうに思ふ。從つて自分ばかり主張したり他人のことを兎角口にする人間が最も先生の好まぬ種類の人類であつたやうだが、而も先生はこれを嫌つたり避けたりすることはなく、何もかも知つて知らん顏をしてをられた。世間で傳へられる先生の奇行は、その鋭い頭腦とかうした先生の性格といふか生活態度といふか、この二つのものゝ現れた結果に他ならないのではあるまいか。

いつのことであつたか、大學の正門の所で先生にお目にかゝり話しながら歩いたことがあつた。偶々私のもつてゐた問題について先生の御意見を伺ふべく大いに辯じ立てたところが先生はうんうんと聽いてゐて下さつた。聽いて下さるから私はいゝ氣になつて喋つてゐたところが、突然—私には實に突然であつた—「夜店を見て行くから、また—」と先生は飄々として熊野神社の横丁を入つて行かれた。私は呆然として先生の後姿を見送つてゐるより他はなかつた。それから一、二ケ月の後大學でお目にかゝつた時、私の話にいろいろ注意され、かういふ本もあると文獻などを敎へて下さつたので私も二度驚き、先生が往來での話でも聞き流してをられぬことを深く感謝したのであつた。

先生は七月七日午前四時永遠に逝かれた。しかし今の私には、呆然として立つてゐる弟子を後にして飄々

と街を往かれる先生としか考へられない。たゞ先生が「また—」といはれなかつたことが、私どもの悲みである。